

## 「オネーギン」(プーシキン)

若き蕩兒<sup>たうじ</sup>オネーギンは「ロンドンの伊達者そつくりの服を着て、フランス語を流暢<sup>りつちやう</sup>に話し、マズルカの足さばきも軽やか」だつたから、当初はペテルスブルクの社交界で持囃<sup>もてはや</sup>されたが、實は自らは幸福でなく、それどころか「早くから彼の心は冷めてゐた」。「ふさぎの蟲<sup>むし</sup>に蝕<sup>むしば</sup>まれ、自殺こそせぬものの人生に熱意を失ひ、バイロンの主人公の憂愁の貴公子チャイルド・ハロルドさながらに、物憂げな様子で他家の客間に出没する。世間の陰口にも無關心で、「空ろな心をもてあましつつ」讀書に耽つてもみるが、退屈だし、「欺瞞<sup>ちめん</sup>と、たは言<sup>ちがひ</sup>」の羅列<sup>られつ</sup>としか思へない。

そんな折、田舎の叔父が死に巨額の遺産<sup>しよんが</sup>が轉<sup>ころが</sup>り込む。オネーギンは田舎の邸に赴くが、「ふさぎの蟲の倦怠」は無くならず、缺伸<sup>あくび</sup>ばかりしてゐるので「危険な變人」との噂が立つ。が、若い地主レンスキーとは馬が合ひ、彼に連れられて地主のラーリン家を訪れる。レンスキーはその家の娘オリガに夢中だつたが、オリガの姉タチャーナはオネーギンを一目見て戀に落ち、

熱烈な告白の手紙を送る。オネーギンは「無垢の魂の信じやすさ」に「胸を突かれ」はするが、娘に會ふと、「僕の魂は仕合せには無縁なのです」、貴女の愛には價しないと冷やかに告げる。タチャーナは「色青ざめ、輝きを失ひ」、萎れて行く。

一方、「憂鬱な怠惰の深み」に嵌つてゐたオネーギンは、或日、レンスキーに無理矢理誘はれたタチャーナの誕生祝ひの祝宴に赴くが、宴席や招待客達の詰らなさにうんざりし、誘つたレンスキーを懲らしめてやるとしてオリガに戯れかかり、嫉妬して逆上したレンスキーに決闘を挑まれ、已むなく決闘を承諾し、相手を射殺して田舎を去る。その後、數年間の漫然たる放浪生活の後、ペテルスブルクの社交界に戻つて來て、今は立派な公爵夫人となつてゐるタチャーナに巡り會ひ、「子供のやうに戀し」て了ひ、熱烈な求愛の手紙を二三度書き送るが返事は無い。夜會で會つても「けはしい顔」を見せられるばかり。

それでもオネーギンは諦められず、タチャーナの邸を訪ねると、青ざめた顔で手紙を讀みながら涙を流す彼女を見る。女は男に云ふ、私は貴方を愛してゐます、でも、母に涙ながらに頼まれての事とは云へ、私はもはや人妻です、「永久に操を立てる」覺悟です。

オネーギンに對するタチャーナの勝利は、「信仰と確信の喪失ゆゑの知的空虚に對する、口

シア人の正義感の勝利の象徴だ」とドストエフスキーは云つた。だが、敗者オネーギンについて、「私は心からわが主人公を愛して」あるともプーシキンは書いてゐる。オネーギンの「知的空虚」は作者自身のものでもあつたからだ。オネーギンに捨てられた後、タチャーナは主無き彼の書齋を訪れ、バイロン關聯の本の多くの頁に残された鋭い爪痕や鉛筆の印を見つけ、それらを眺める裡に男の「心が知らぬ間に透けて見え」、オネーギンは「單なる模倣、詰まらぬ幻影」、「ハロルドのマントを着たモスクワ人」、詰りは「パロディ」でしかなかつたのか、と疑ふに至る。要するに、西歐の先進文化を模倣して「知的空虚」に陥つたオネーギンは、云はば我が中島敦が「カメレオン日記」に云ふ「お洒落鴉」の輩とよからだつたのだ。「レヲパルディの羽を少し、シヨペンハウエルの羽を少し、ルクレティウスの羽を少し」、「何といふ醜怪な鳥だ」。だが、プーシキンはタチャーナをも描いた。「スペードの女王」に彼は云ふ、「精神界に二つの固着觀念の共に存し得ぬのは、恰あたかも物質界に二つの物體が同時に同じ場所を占め得ぬと同斷でもあらうか」(神西清譯)。結局、プーシキンは西歐とロシアとに由來する「二つの固着觀念」に引裂かれて懊惱あうなうし、發狂寸前に迄至るのである。

(池田健太郎譯、岩波文庫)